

やっ はぎ 八束脛洞窟遺跡出土のヒトの歯（その 1）*

問う 縄文人の歯ではないか？

杉 本 茂 春**

I. 八束脛洞窟遺跡

八束脛洞窟遺跡は、群馬県利根郡月夜野町大字後閑字穴切にある。その遺跡から多数の人骨に混って52本に及ぶ多数のヒトの歯が出土した。

これらに関する報告ならびに研究は、飯島義雄、宮崎重雄、外山和夫氏らの共著になる群馬県立歴史博物館紀要、第6号(1985)同第7号(1986)に発表されている。

私は、群馬県埋蔵文化財調査事業団、飯島義雄氏の格別の協力を得て、1986年10月21日、群馬県立歴史博物館を訪れ、特別観覧の機会を与えられ、八束脛洞窟遺跡出土のヒトの歯をひとつひとつ手にとって熟視、観覧することができた。

また、宮崎重雄氏の案内で、同日、月夜野町郷土歴史資料館を訪れ、展示中の八束脛洞窟遺跡出土のヒトの歯をも特別に観覧することもできた。

なお、標高745メートル、石尊山の頂上に近い険しい山肌にある八束脛洞窟遺跡を指呼のあいだに展望して、地勢、地理の概観をも推察することができた。谷川岳にほど近い利根川の上流地方で、四辺ようやく山迫る地域である。

弥生時代、少なくとも2000～2500年以前、この地方の山間地帯、当時の樹林相を想像すると、新しく渡来してきた農耕系弥生人がここに住みつき、農耕を営める状態ではなかっただろう。

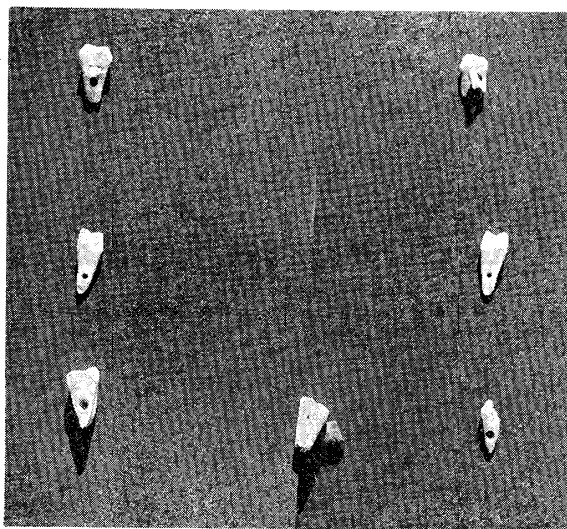


図 1

II. 古代人の歯

直接目にした古代人の歯、その1本1本の概観はそれぞれ現代日本人の歯に対応していて、まず、誤りはないだろう。しかし、どこことなく異なりを覚えるのも事実。

日に日に現代日本人の歯を診察しつづけてきた臨床歯科医にとって、直観として覚える異なりの意義をおろそかにすることはできない。

数少ない貴重な古代人の歯の鑑別診断を、現代日本人の歯を基準として簡単に比較、判断するわけにはいかない。

とは言っても、今直ちに古代人の歯を切りきざみ、剖検、検鏡することも許されない。また、50本に余る多数とはいえ、それら1本1本の計測値を比較して論を進めることもできない。

* Human teeth unearthed at relics of Yatsuhagi cave (No. 1)

Human teeth of Jomon period?

** Shigeharu SUGIMOTO: Osaka

しかしながら、少なくとも古代人の歯を直視して感じる概観の相異は何に由来しているのだろうか。

古来、先住の縄文人は山間に住んで狩猟を営み、獣を友として暮らす狩猟民族と考えられるから、弥生人が渡来してきた後も、各地の山間を拠点として散り散りになり、ふもとの平野部まで進出してきて弥生人の文化の洗礼をうけつつ、なお生き続ける先住、狩猟の民であったと考えることができる。

III. 研究の方法

1. 古代人の歯を歯学で目で見直す

1) 古代人の歯は現代日本人の歯に似ている。

2) 歯学で目でも見た感じはどことなく異なりを覚える。例えば下顎第1大臼歯の咬合面観において、5咬頭の位置形態は現代人のそれと似ているけれども、本来著明であるべき横溝の一部を欠いているものがあつた。

3) 古代人の歯の種類は、上下左右の前歯、小臼歯、大臼歯ならびに根尖未完の乳歯、永久歯萌出にともなう吸収痕のない完成乳歯などであつた。また、多くは健全歯であつた。

4) 人類進化の過程では歯の形も、数も変わると考えられている。異なりを覚える理由は、

- i) 人類進化の過程における異なりなのか。
- ii) 個体間の微差とみるべきか。不明である。

2. 古代人の歯を記・紀を通して見直す

古事記、三貴子の分治の項に、

天照大御神に「汝命は、高天の原を知らせ」

月読命に「汝命は夜の食国を知らせ」

建速須佐之男命に「海原を知らせ」と事依さしき。(古事記；岩波文庫)とあり、日本書紀には月読命を月夜見尊としている。月、読、夜、見を漢字学からみると、夜目遠目が利くという意があるから、山を巡って狩猟を営む先住民、国津神たちを統治する任務の人。

因に高天の原は太陽の恵み潤う日照の国、海を渡って来た農耕民、天下り天津神たち。

海原とは南方系の漁労民、海人わだづみ族。

このように考えると、弥生時代の到来につれて縄文文化は急激にすたれるけれども、山間には先住縄文人の血を引く、『山姥』などの伝承が残っていても不思議ではない。裏を返せば、日本人の大きな源流となる弥生人は、平和を愛し、先住民との共存を図る優秀な民族であったと考えられる。

3. 古代人の歯を文化人類学から見直す

前歯、犬歯、第1小臼歯は生前に通過儀礼として抜去されることもあつた。

1) 成人儀礼抜歯

成人の象徴として犬歯を抜去したことは広く知られている。その場合、抜歯時の苦痛に耐えること自体が目的と考えられたり、牙をむき出す野獣の醜貌に似ることをきらい、犬歯を抜去したと言われている。このように考えると成人儀礼に随って抜かれた犬歯は不用で、保存する必要はなかっただろう。

2) 婚姻儀礼抜歯

女性が婚姻に先立って上顎中切歯2本を抜去する風習は、中国少数民族苗族、獐嫫にもあり、古くからわが国にもあつた。理由は、最愛の夫家を害せざるため、一種の口淫風習に属するもの。随ってこの場合も陽根を口に含むための空隙が必要で、抜去した歯を保存する必要はなかった。

3) 葬送儀礼抜歯

近親者や夫が死亡したとき、妻は慰霊のために抜歯したといわれる。また、慰霊以前に変貌の目的で抜歯したと考えられた。この場合も抜いた歯は死者に持たせてやるか、変貌のためなら保存する必要はなかった。

4) 死後抜去(大臼歯)

大臼歯は食物摂取、咀嚼を果たす意味からも生前に抜歯しなかつただろう。打去、折去手段では生体からの大臼歯抜去は不可能。このように考えると、少なくとも大臼歯は死後に故あって抜去されたに違いない。しかし、死後抜去の意義、目的はわからない。

5) 死後抜去(乳歯)

吸収痕のない完成した乳歯及び根端未閉鎖の乳

歯は成人儀礼、婚姻儀礼、葬送儀礼抜歯のいずれにもあたらないだろう。したがって生体から直接抜去されたものとは考えられない。死後に抜去されたものに違いない。愛児の死後にわざわざ乳歯を抜去する意義、目的はわからない。

6) 加熱歯

古代人の歯は火熱をこうむった痕跡が認められた。しかしその意義、目的はわからない。

7) 多くの歯の歯根部に人工による穿孔が施されていた。しかし、その技術ならびに穿孔の意義、目的はわからない。

4. 穿孔歯を文化人類学から見直す

1) 硬組織で包まれた歯には歯髄と呼ばれる軟組織を内蔵している。したがって歯は、その保有者と同じ臭気を発散させる。同行二人笠の思想と同じで、狩猟に長じた強者の生前をしのび、死後その人の歯を身に付けることによって大きな安心感を抱いたであろう。

2) また、呪術師の呪術力をうけ継ぎ、それにあやかろうと考えた呪術師の後継者は、呪術師の死後、ひそかに呪術師の歯を抜きとって身につけ、より優秀な呪術力を身につけようと考えたに違いない。

3) 多くの野獣は嗅覚が鋭く、特に犬の臭気を恐れた。その反面、犬が狩猟能力をフルに発揮する活躍期間は短い。愛する狩猟犬の死後、その犬の犬歯を身につけることによって野獣は犬の臭気を察知して、いち早く逃れ去るだろう。

ひとりで危険な山巡りに出ても、出会いがしらにクマやオオカミに襲われることのない人は、幸

運の人、霊力そなわる人として尊敬された。

犬の犬歯を身につけた古代人は、科学的な根拠や理由を知る以前に、決して野獣に襲われることのない呪術力をそなえたと信じられる事実を認識していた。

4) 乳歯の死後抜去については、『史記会注考証』匈奴列伝を参考すると、幼児が遊びのうちに狩猟を学ぼうとして野外に出、野獣に襲われて横死した場合、その父親は遺骸から乳歯を抜きとって身につけ、機会があったら報復しようと考えたのではないか。

5) 狩猟は生きるために山の神、森の神から授かった犠牲獣を狩ることであり、憎み殺す戦いではない。理由もなく罪なき子どもをあやめることは許されないと理解していたのだろう。

IV. む す び

八束脛洞窟遺跡出土のヒトの歯は、『史記匈奴列伝』を参考として、狩猟民族の風習を考えあわせ、わが国では弥生時代に入っても、狩猟を主として獣類との共存をかたくなに守りつづけ、山間にたてこもった縄文期以来、先住した日本人の歯ではないかと考えている。

文 献

- 1) 群馬県立歴史博物館紀要 6 1985
- 1) 群馬県立歴史博物館紀要 7 1986
- 1) 臨牀歯科 319 1987
- 1) 古事記
- 1) 史記会注考証
- 1) 説文解字
- 1) 説文解字詁林